

マルコによる福音書 5章 1節～20節

2015年7月23日

古本 靖久

1、聖歌 531番 「いやし主イエスの 愛の手を祈る」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 69 ページ）

4、テキストの位置

今回の箇所は、前回の湖上の嵐を静めた出来事に続くいやしの奇跡物語です。

しかし今までのいやしとは決定的に違うことがあります。それは異邦人の地（ユダヤ以外の地）でイエス様が活動されたということです。

ガリラヤ宣教② (たとえ)	4:1-20	種と土地のたとえ
	4:21-23	ともし火はあらわにされる
	4:24-25	量られるわたしたち
	4:26-29	種の成長と神の国
	4:30-32	神の国はからし種
	4:33-34	イエスはたとえを用いる
ガリラヤ宣教② (奇跡)	4:35-41	自然を支配する
	5:1-20	異邦人の地で悪霊を追い出す
	5:21-43	病人のいやしと死人の復活

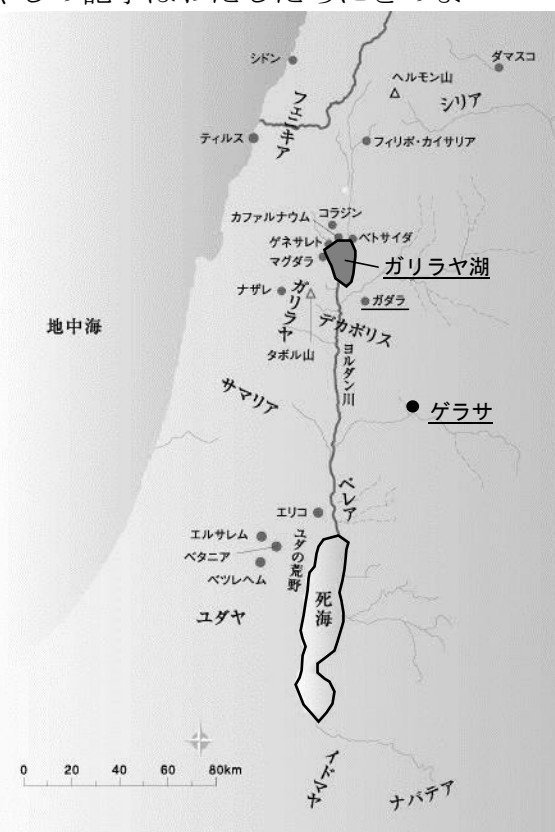
主日の礼拝ではこの箇所は読まれません。しかしこのいやしの記事はわたしたちにどのようなメッセージを与えてくれるのでしょうか。

5、節ごとに

◆異邦人の地で悪霊を追い出す

5:1 (そして) 一行(彼ら)は、湖(海)の向こう岸にある(、)ゲラサ人の地方に着いた(来た)。

ゲラサはガリラヤ湖岸から直線距離で50～60kmにある町です。そのため、豚がその距離を走りきることに違和感もあり、ガダラなど、様々な異読があります。(マタイ福音書ではガダラとなっています)。しかしガダラにしても、ガリラヤ湖からは10kmの距離にあります。



聖書本文には「ゲラサ人の地方」と書いてあるだけですから、マルコはガリラヤ湖の東岸を「ゲラサ人の支配する地域」として見ていた、ということなのでしょう。

しかしここで重要なのは奇跡が行なわれた正確な場所ではなく、ゲラサのあるデカポリスはユダヤ人以外の人々が住んでいる都市、つまり異邦人の地であるということです。

イエス様と弟子たちはこのころ湖を繰り返し横断しています。そのことはユダヤ人と異邦人とを隔てる壁を壊すことです。マルコ福音書においては、異邦人伝道は大きな関心事の一つなのです。

5:2 (そして) イエス (彼) が舟から上がられる (出る) とすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た (出て来て彼に出会った)。

イエス様は異邦人の地に足を踏み入れます。そこに一人の人がやって来ます。彼は汚れた霊に取りつかれており、墓場からやって来ます。

墓場はユダヤ人にとって、汚れた場所とされていました。悪霊の住みかであり、死の領域でもありました。また墓に触れると汚れるとされており、誤って触れてしまわないように、墓を白く塗るという慣習 (マタイ 23:27 参照) もあったようです。

汚れた地 (異邦人の地) にいる汚れた霊に取りつかれた人が、汚れた場所 (墓場) からイエス様の元へとやってきたわけです。



5:3-5 この人は墓場を住まい（住みか）としており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめて（縛って）おくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で（にいて）叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。

彼の姿は、イザヤ書 65 章 4～5 節に出てくる描写を思い起こさせます。

墓場に座り、隠れた所で夜を過ごし 豚の肉を食べ、汚れた肉の汁を器に入れながら「遠ざかっているがよい、わたしに近づくな わたしはお前にとってあまりに清い」と言う。これらの者は、わたしに怒りの煙を吐かせ 絶えることなく火を燃え上がらせる。

イザヤ書では、汚れた者に対する神さまの怒りが書かれています。同じように「汚れた」とされるイエス様の前にあらわれたこの人物に対して、イエス様はどのように関わっていくのでしょうか。

その男は汚れた霊によって、人間らしさが奪われていました。 周囲から見捨てられ、すべての人間関係から排除された彼には、絶望的な破滅しか、道は残されていなかったのです。

5:6-8 （そして）イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し（拝し）、大声で叫んだ（で言う）。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ（あなたはわたしと何の関わりがあるというのか）。後生だから（神にかけてわたしはあなたにお願いする）、（わたしを）苦しめないでほしい（るな）。」（というのも）イエス（彼）が（彼に）、「汚れた霊（よ）、この人から出て行け」と言われたからである。

1 章 24 節に出て来た汚れた霊に取りつかれた男も、同じような言葉を言っていました。

「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」

今回は「ナザレのイエス」が「いと高き神の子イエス」となっています。「いと高き」という言葉は、旧約聖書ではイスラエル人ではない人たちがイスラエルの神を呼ぶ時に使われていました。

汚れた霊に取りつかれた男は、救われるためにイエス様の元に行ったのではありませんでした。自分とイエス様との関係を否定し、関わることを拒絶したのです。

汚れた霊はよくイエス様の名を口にします。悪霊退治のときなど、相手の名を呼ぶことで自分の支配下に置き、相手の力を封じ込めると考えられていたそうです。

5:9-10 そこで（そして）、イエス（彼）が（は彼に）、「（あなたの）名は何というのか」とお尋ねになると、（彼は彼に）「（わたしの）名はレギオン。（わたしたちは）大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエス（彼）にしきりに願った。

レギオンというのはローマ帝国の軍隊用語であり、軍団を意味します。およそ 5000 人のこの軍団は、ローマ帝国には 25 あって、紀元 1 世紀ごろにユダヤに駐屯していた第 10 軍団は、軍旗の象徴に雄豚を用いていたそうです。

「レギオン」という名前は、ユダヤ人にとって反感や軽蔑感を持つものであったことでしょう。そしてその大勢の敵に立ち向かうイエス様の姿は、ユダヤ人にとって、どんな敵からも自分たちを救ってくれる希望に見えたに違いありません。

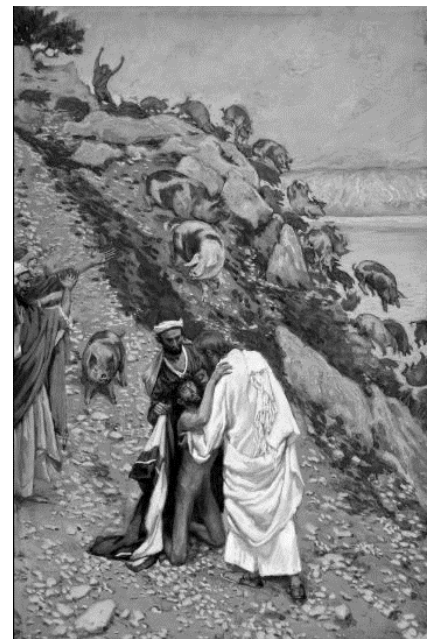
5:11-13 ところで、その辺りの山（の麓）で豚の大群がえさをあさって（飼われて）いた。（そこで）汚れた霊ども（彼ら）はイエス（彼）に、「（わたしたちをあの）豚の中に送り込み（んで欲しい）、乗り移らせてくれ（その中に入れるように）」と願った。（そして）イエス（彼）がお許しになったので、汚れた霊どもは出て（行き）、豚の中に入った。すると（そして）、二千匹（頭）ほどの豚の群れが崖を下って湖（海）になだれ込み、湖（海）の中で次々とおぼれ死んだ（た）。

豚はユダヤ人にとって、不浄なものでした。肉を食べることはおろか、飼ってもいけませんでした。豚がかわいそうだという声がかきこえてきそうですが、ここでは「豚はユダヤ人が忌み嫌っていた存在だ」というところにだけ目を置きましょう。

汚れた霊は豚の中に入っていました。そして湖の中に姿を消します。水の中に入ることは死を意味します。洗礼の時に水をくぐるのも、一度死の中に沈むという意味があります。汚れた霊と一緒に、豚はその中でおぼれていきます。

しかしどうして「豚」が必要だったのでしょうか。汚れた霊だけを追い出すこともできたのではないのでしょうか。最初にここは異邦人の地であると説明しました。異邦人の地はユダヤ人にとって汚れた場所でした。その象徴が豚だったので。（少しかわいそうですが）。

つまり、その地の豚の大群が水の中に入れられ、豚たちが地からいなくなることは、その地が清められたことを意味したのです。



5:14-16 (そして) 豚飼いたちは逃げ出し、町や村(里)にこのことを知らせ(告げ)た。
(そして) 人々(彼ら)は何が起こったのかと見に来た。(そして) 彼らはイエスの
のところに来ると(て)、レギオン(悪霊)に取りつかれていた人が服を着、正気
になって座っているのを(おり、それがレギオンを宿していた者であるのを) 見
て、恐ろしくなった(れた)。(そして) 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取
りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々(彼ら)に語った(説明した)。

豚飼いたちは、何が起こったのかと驚いたことでしょう。そして恐れをなして町の人たち
に伝えます。しかしそこで言ったことは、「すごいことをするお方が現れたぞ」ではなく、
「俺の財産を無くしてしまったとんでもない男が現れた」ではなかったのでしょうか。

見に来た人々が目にしたのは、汚れた霊に取りつかれていた人が社会生活への復帰を果
たした姿でした。

そしてさらに証言者が現れ、イエス様のことと、汚れた霊に取りつかれていた男に一体何
が起こったのかを証言していきます。

5:17 そこで(そして)、人々(彼ら)はイエス(彼)にそ(彼ら)の地方(地域)から出
て行ってもらいたいと言いだし(願い始め)た。

以前ベルゼブル論争のときに、イエス様は悪霊の頭の力を借りて、悪霊を追い出している
という疑惑をもたれていました。今回もイエス様の力に、悪魔的なものを感じてしまったの
でしょうか。

それともこれ以上自分たちの家畜を殺されることを恐れたのか。結果的に、汚れた霊と同
じように、彼らはイエス様と関わりを持つことを拒絶します。

5:18 (そして) イエス(彼)が舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、(彼と)
一緒に行きたい(共にいたい)と願った。

しかしたった一人だけ、イエス様のことを正しく理解した人がいました。汚れた霊から解
放された人です。彼はイエス様と共にいたいと願います。

この願いこそが、イエス様に対する正しい反応なのです。わたしたちはどうでしょうか。
イエス様の大いなる愛の力に触れたときに、そこから身を引こうとするでしょうか。それと
もこれからも一緒にいたいと願うでしょうか。

5:19-20 (しかし)イエス(彼)は(彼に)それを許さないで、(彼に)こう言われた(る)。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人(、自分の者たちのところ)に、(行きなさい)。(そして彼らに)主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」(そして)その人(彼)は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に(で)言い広め(宣べ伝え)始めた。(そして)人々は皆驚いた。

しかしイエス様は彼を家に帰らせます。しかしここで強調されているのは、ついて来ることを許さなかったということではなく、「行って、知らせなさい」ということです。イエス様は彼を伝道者として派遣しているのです。

彼は「主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったこと」を知らせるようにとされます。ここでの「憐れみ」は、同情する、助ける、慈悲を与えるという意味です。イエス様がなされたことすべて、イエス様自身を彼は「宣教」していくのです。

イエス様が足を踏み入れた地はユダヤ人にとって汚れた地でした。汚れた霊、墓場、豚、といった単語であらわされる「汚れた」異邦人の地が、今や神さまの恵みの地、救いの地となり、喜びの知らせが伝えられる場となったのです。

<今日の箇所から>

汚れた霊に取りつかれた男には、二千もの霊が入り込んでいました。人々からは見捨てられ、もうどうしようもない状態にあったその人は、ユダヤ人から見たら、滅ぼされて当然の人だったのかもしれませんが。しかしイエス様は、その人に手を差し伸べます。

イエス様にとってユダヤ人も異邦人も、清い人も汚れた人も、関係ありませんでした。どのような人とも関わってくださる、だからわたしたちの元にも来てくださるのです。

イエス様はわたしたちの元に来られ、肉体や心をいやしてくださることがあります。そのときに、イエス様は現状への回復だけではなく、心の転換をもおこなわれることを、今日の箇所は伝えています。

わたしたちはそのイエス様のみ手に触れられたときに、ただ恐れることではなく、み跡に従うことを求められています。イエス様と共に生き、イエス様を伝えていくことがわたしたちがなすべきことなのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は9月24日(木)10時30分からです。「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」(マルコ5:21~43)について学んでいきます。